47th GALAXY AWARDS
ギャラクシー賞贈賞式

放送作品・関係者に贈られる賞としては「国内で最高の栄誉」とも言われるギャラクシー賞。その第四七回贈賞式が六月三日、ウェスティンホテル東京のギャラクシールームにて開催された。集まった放送、広告、芸能関係者は約六〇〇名。緊張と興奮と称賛にステージが湧いた。

今回、応募・選奨された作品は、四部門合わせて六〇〇本余。その中から、CM部門（13）、ラジオ部門（8）、報道活動部門（6）、テレビ部門（14）の順に、それぞれの入賞作（カッコ内は入賞作品数）がステージで表彰される。さらにその中から〈優秀賞〉〈大賞〉の栄冠に輝いた作品にトロフィが贈られた。その他にテレビ部門の〈特別賞〉〈個人賞〉、ラジオ部門の〈DJパーソナリティ賞〉、そして今年度新たに放送批評懇談会が創設した〈志賀信夫賞〉が発表・表彰された。

贈賞式に続いて隣のスタールームで開催された宴では、〈マイベストTV賞グランプリ〉の表彰や受賞者へのインタビューなどで、満員の会場が盛り上がった。

司会は第45回DJパーソナリティ賞に輝いた中国放送の青山高治氏と、J-WAVEでおなじみフリーアナウンサーの東海林克江氏。

テレビ部門

山崎氏からトロフィを譲り渡されるディレクターの堀川恵子氏。「死刑に対しての議論が浅いのが現状。その議論を深めてもらうためにこの番組を制作した。その一心です」。

【テレビ部門・大賞】
大賞は日本放送協会のETV特集「死刑囚　永山則夫〜獄中28年間の対話」。音好宏理事長からトロフィを受け取るのは、制作会社いちまるよん代表の山崎裕氏。「40年ぶりにもう一度永山と向かいあえたのは、ディレクターの堀川のおかげ。彼女の執念がこの作品を生んだ」。長年ドキュメンタリー作品のカメラマンとして活躍してきた山崎氏は、7/10公開の「トルソ」では劇場映画初監督も務めている。

［テレビ部門・優秀賞］

「少人数で知恵を絞りながら制作しています。北海道の風土や生活ぶりをしっかりと伝えたい」と語るHTBスペシャルドラマ「ミエルヒ」のプロデューサー、福屋渉氏（北海道テレビ放送）。

TBSテレビ、日曜劇場「JIN―仁―」のプロデューサー、石丸彰彦氏。マイベストTV賞グランプリも同時受賞。「最終回の終わり方は当初の予定通り。賛否がないとブームにはならない」。

読売テレビ放送／ハウフルスの秘密のケンミンSHOW「2010年今年もよろしく友愛スペシャル」の津田誠氏（ハウフルス）は「地方出身のスタッフが多いので、ネタには困りません」。

登壇したテレビ部門の受賞者たち

ラジオ部門

【ラジオ部門・大賞】

パーソナリティのジョン・カビラ氏。「第一報を聞いた時は、あり得ない……間違いに違いないから調べなければと思い、ネットや海外の局に取材しました。真実だということをリスナーと体感していくという、放送人としては有り難い瞬間でしたが、つらいものもありました。すばらしい楽曲の数々をマイケルのストーリーと一緒にかけ続けることで、死を悼みました」と、複雑な胸中を語った。

2009年6月26日、マイケル・ジャクソン急逝の報にすぐ対応し、ラジオの神髄を見せたJ-WAVEの「～JK RADIO～TOKYO UNITED」。プロデューサーの松尾健司氏は「ムーンウォークをしたくなるような……ビックリしてます」と喜び、「瞬時に海外と連絡をとるなどの現場の判断と、それについてきたスタッフの力でした」とスタッフに謝意を表わした。

【ラジオ部門・個人賞】

受賞したやのひろみ氏は、女児を出産した直後で欠席。代わって、ご夫君であり、やのさんの番組も担当しているラジオディレクターの佐藤重幸氏が松山から駆けつけ、手紙を代読した。「13年前、裏方志望の私がマイクの前に座ったのは人数合わせのためでした。素人丸出し、方言丸出しの私にお叱りを受けたことも……。これからも自分にしかできない喋りを、愛媛から発信していきます」。

［ラジオ部門・優秀賞］

「留守番電話でメッセージを頂くんですが、大事件から日常の小さな事まで紹介する、ラジオの原点のような番組」と、毎日放送「上泉雄一のええなぁ！」の上泉氏（アナウンスセンター副部長）。

「伝えたはずの予報を信じてもらえず被害が大きくなったと聞き、『伊勢湾台風50年』は始まったんです」と熱く語ったのは、気象予報士でもある澤朋宏氏（中部日本放送アナウンス部課長代理）。

NHKのFMシアター「心にナイフをしのばせて」のチーフディレクター望月良雄氏。「原作を読んで1年間迷った。自分も他者の心の痛みに逃げていたのではと自己反省を込めて作った」と述べた。

【テレビ部門・選奨】

個人として奨励賞を受けた國村準氏。宴では、間もなく封切られる「アウトレイジ」について「かなり笑えます」と披露した。

【テレビ部門・特別賞】

ETV特集「シリーズ　日本と朝鮮半島2000年」が特別賞を受賞。日本放送協会のチーフプロデューサー、塩田純氏と増田秀樹氏、ディレクターの浜田裕造氏が登壇。「今年が韓国併合100年。この節目に日韓交流の歴史を皆さんに考えてもらいたい」（塩田氏）、「視聴者から『両国の歴史観が違うことがよく分かった』という声をいただいた」（増田氏）、「難しい内容なので、分かりやすく伝えることにこだわった」（浜田氏）。
（右から塩田、増田、浜田の各氏。）

【テレビ部門・個人賞】

個人賞受賞の笑福亭鶴瓶氏。「テレビに関わっている人間にとっては本当にうれしい賞。テレビが大好きなので、『テレビっていいな』といつまでも思われたい。そういうバラエティを今後も作りたい」。司会の青山氏から「素人さんへのインタビューのコツは」と聞かれると、「プロとして、相手をしっかりと守るような心がけが大事です」。壇上には「A-Studio」で鶴瓶氏のアシスタントを務めているIMALU氏がサプライズゲストとして登場。「昨日お会いしたときも、今日のことは秘密にしていました」。

47th GALAXY AWARDS

報道活動部門

【報道活動部門・大賞】

こみ上げる嬉しさを抑えきれず思わず涙を見せたのは、鹿児島テレビ放送「ナマ・イキvoice～オンナたちの小さな挑戦・20年」プロデューサーの石神由美子氏。「たくさんの人たちに支えられ、視聴者に本気で参加してもらって、自分たちも本気で視聴者を頼って、1本ずつやってきたので本当に嬉しい。1本1本は小さな事でも、続けることで色んな事ができた」と喜びをにじませる。「女性の女性による女性のための番組を20年間コツコツ作り続けてきた」と報道活動部門の委員長は評価。

［報道活動部門・優秀賞］

朝日放送のNEWSゆう十「追及！終わらない年金問題」について、情報センター記者の天本周一氏は、「本丸は東京なので取材が難しかった。東京からは何件片づいたという数字の情報は流れるけれど、人の姿は見えてこなかったので、そういう人に接するたびに憤りを感じた」と語った。

札幌テレビ放送「聴覚障害偽装事件」の一連の報道は、追及を北海道全土にどんどん広げていった告発ドキュメント。「思いもよらないような手口で、障害者手帳でビジネスが行なわれていた。北海道は広いので、多岐に渡って取材するのは大変でした」と報道部記者の眞鍋浩史氏。

撮影／官野 貴　菊池雅之

式に続く宴も大盛況

来賓挨拶は日本放送協会会長の福地茂雄氏

乾杯の音頭はWOWOW代表取締役社長の和崎信哉氏

ハイビジョン特集「『津軽』生誕100年　太宰治と故郷」で選奨を受賞した日本放送協会とテレコムスタッフの方々

600名が参加して、盛り上がった懇親会

贈賞式・宴の会場への入り口

CM部門で入賞した資生堂、グリコの方々と選奨委員

テレビ部門選奨のNHKスペシャル「日本海軍　400時間の証言」のスタッフの方々

志賀信夫賞

新設された「志賀信夫賞」の第1回受賞者は澤田隆治氏。「てなもんや三度笠」「花王名人劇場」などテレビ放送の草創期から多くの名番組を世に送り出し、ATPの法人化、日本映像事業協会の創設など制作者の地位の向上にも尽力してきた氏は、「77歳になり、そろそろ一線を退こうと思っていた時にこの賞を受賞。『もっとやれ』ということなのでしょう。いい番組を作っていかないとテレビの未来はない。10年後のテレビを誰が作るのか。残りの人生、しっかりとがんばり、その役に立ちたい」。

「てなもんや三度笠」以来の付き合いになるという由実かおる氏が祝福に駆けつけ、「これからもトップに立って頑張ってください」と激励。

CM部門

【CM部門・大賞】

大賞に輝いたのは、郵便事業の「平成22年用年賀はがきシリーズ」。ケータイやメールで逆境にある年賀状の良さを、情感あふれるストーリーに仕上げた。「手紙離れの中で、小栗（旬）さんや榮倉（奈々）さん世代の方が、せめて年賀状ぐらいは一年に一度書いてほしいと思いました」と伊藤克彦氏（郵便事業）。

CM部門委員長より賞状を受けた入賞の方々

［CM部門・優秀賞］

聴取率週間に放送したRKBラジオのシリーズ「夫婦篇」。「せっかくラテ兼営局なので、テレビを使ってうまくPRできないか考えた」と柴田喜之氏（RKB毎日放送）。

資生堂の「UNOフォグバーシリーズ」は、「ビートルズとわからない程度にビートルズのイメージを作りました」と佐々木宏氏（シンガタ）。